

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「木鶏（もっけい）」って？～

教師になってから、さまざまな研修会に参加させていただきましたが、一番心に残っている講演があります。三木英一先生（兵庫県出身 英斎塾（人間学探求）塾長。東京教育大学（現・筑波大学）文学部文学科卒業。兵庫県立高校英語教師十八年間勤務後、兵庫県警察学校副校長、兵庫県立高等学校校長など歴任。退職後、英斎塾を創設するとともに、人間学等の講義など、講演は約二千五百回に及ぶ。平成六年、教育者文部大臣表彰受賞。平成六年、兵庫県教育功労賞受賞。平成十七年、春の叙勲瑞宝小綬章受章。）の講演です。

講演中、必死に講演のメモを取り続けていました。その講演の中で故事の「木鶏」という話がありました。今回はそのお話を紹介しますね。「木鶏」とは木彫りの鶏のことですが・・・

中国の古典「莊子」に「木鶏」という話があります。

紀省子という人が、闘鶏の好きな王のために、軍鶏を養って調教訓練をしていました。

十日ほどたったころ、王が

「もうよいか」

と聞きましたところ、

紀省子は・・・

「いやまだいけません。空威張りして「俺が、俺が」というところがあります。」

と答えました。

さらに十日たって聞きますと、

「まだだめです。相手の姿を見たり声を聞いたりすると、興奮します。」

また十日ほどたって聞きますと、

「まだだめです。相手を見ると、睨みつけて、圧倒しようとするところがあります。」

こうしてさらに十日たって、また王が聞きますと、初めて

「まあ、どうにかよろしいでしょう。」

「他の鶏の声がしても、少しも平生と変わるところがありません。」

その姿はまるで木彫りの鶏のようで微動もしません。全く徳が充実しました。

もうどんな鶏を連れてきても、これに応戦するものはなく、姿を見ただけで、逃げてしまうでしょう。」

といました。

これがいわゆる「莊子の木鶏」で、その鶏は非常に強く、敵がいてもいなくても、眼中にない態度でした。

そして相手の鶏は、闘う前にすくんでしまって、その「木鶏」は百戦百勝だったそうです。



木鶏というのは、本物だということです。

本物の人物は、経済力があるからとか、社会的地位が高いからと、空威張りして、「俺が、俺が」になったり、相手を見つけると、睨みつけて、圧倒しようとするような、そういう「形」にとらわれません。

競争相手に勝ち、短期的な利益を上げ、有名な実業家・経営者になり、マスコミ受けするようなことを言っている人もいますが・・・

それは「本物の経営者・実業家」とは言えないのではないのでしょうか。

なかなか「本物＝木鶏」になれないものです。

この「木鶏」の話ですが・・・こんな逸話もあります。裏面へ・・・どうぞ・・・



双葉山（1912年2月9日 - 1968年12月16日 大分県宇佐郡天津村出身の元大相撲力士。第35代横綱。本名は穰吉 定次（あきよし さだじ）という大横綱がいました。

安岡正篤（やすおか まさひろ 1898年 - 1983年 陽明学者・哲学者・思想家。）先生は、
双葉山に「木鶏」の話をし、書まで書いて渡しています。



双葉山が、大相撲の最多連勝記録である**六十九連勝**という偉業をなしとげる前ですが、強いとい
うので、たいへん人気の出ている頃でした。

安岡先生が・・・

「君は・・・まだまだ、だめだ。」

というと・・・双葉山はさすがに謙虚で・・・

「なぜだめですか」

と問い返しました。

そこで安岡先生は、「木鶏」の故事を説いたところ・・・

双葉山はたいへん感じ入り、

先生からもらった書を朝晩静座(心を落ち着けて静かに座る)し、

木鶏になる訓練をしたというのです。

これには後日談があります。

ヨーロッパへ行く船に乗船中の安岡先生に・・・

双葉山から・・・

「イマダ モクケイニ オヨバズ」

という電報が届きました。

七十連勝を目前に敗れたことを電報で安岡先生に知らせきた
たのです。



双葉山は約3年ぶりとなる黒星を喫し、連勝を69で止められたにも関わらず、悔しさ
や絶望感などを表情に見せることなく普段通り一礼し、東の花道を引き揚げて行った。

同じ東方の支度部屋を使っており、この後の結びの一番のために土俵下で控えていた力士
は、取組後の双葉山について

「あの男(双葉山)は勝っても負けても全く変わらないな。」

と語っています。・・・

さて、あなたは「イマダモクケイニオヨバズ」というこの電報を送った双葉山の心情とは？
受取った安岡先生の心情とは？・・・どうだったのか想像してみてください。